

NEWSLETTER

～ 目次 ～

- ◆ アクティブラーニングニュースレター(p.1)
- ◆ アクティブラーニングとは？ (p.1)
- ◆ EX 部門活動報告
 - ・ アクティブラーニング型授業モデルの開発 (p.1)
 - ・ ワークショップの開催(p.3)
- ◆ 今後の活動予定(p.4)
- ◆ 書籍『つくって学ぶアクティブラーニング』のお知らせ(p.4)

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングは駒場アクティブラーニングスタジオ (KALS、東京大学駒場キャンパス 17 号館 2 階) といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングをとり入れる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。気になる記事がありましたら、東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 Educational Transformation(EX)部門 (旧アクティブラーニング部門と初年次教育部門・自然科学教育高度化部門が統合する形で 2023 年 4 月に新設) までお問い合わせください。(若杉)

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中に読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつ

かなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。(若杉)

◆ EX 部門活動報告

2024 年度前半の EX 部門のアクティブラーニング関連の活動を紹介します。

アクティブラーニング型授業モデルの開発

EX 部門では、授業の開講を通して、アクティブラーニング型授業のモデル開発や試行を行っています。2024 年度 S セメスターは、3 授業を開講しました。各授業の概要やアクティブラーニング型授業モデルについて得られた知見を簡単に紹介します。

(1) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習:
未来の学びを考える

「未来の学びを考える」(担当教員: 中澤明子) では、教育・学習について過去や現在の状況を理解した上で、10 年後の未来の学びがどうなるかを自分なりに考えること、その過程で自身の教育・学習経験をふり返って教育・学習の理論に位置づけることを目的としました。昨年度までは「文献講読編」、「理論と事例編」と分けて開講しました。今年度からは、二つの授業を統合して開講しています。

授業は、未来の学びを考える手がかりを得るための文献講読(第 2 回～第 5 回、第 7 回)と事例(第 6 回、第 8 回～第 9 回)、その後の議論の 3 パートに分かれています。

まず、第 1 回のガイダンスの後、第 2 回～第 5 回、第 7 回はジグソー法を用いた文献講読を行いました。第 6 回、第 8 回～第 9 回の授業は、ゲスト講師による講義を行いました。第 6 回はゲーム学習、第 8 回はものづくりワークショップやプログラミング教育、第 9 回は学校現場でのアクティブラーニングや ICT 活用について、3 名の講師の方にそれぞれお話しいただきました。

第10回の授業では、これまでも行ってきた「作品をつくって行うふりかえり」(AL NEWSLETTER Vol.7, No.4)の活動を行いました。

第11回、第12回は受講生一人ひとりが10年後の未来の学びについて考え、議論する授業回です。どちらの授業回も生成AIを使った学習活動を行いました(参照:AL NEWSLETTER Vol.9, No.2)。また、どちらの授業回でも受講生は、自分の未来の学びの考えをさらに深めるために、ほかの人から意見を聞きたい、あるいは議論したい質問を考えました。そして、3~4人ずつ4つのグループに分かれ10分程度議論するセッションを7回行いました。ワールドカフェを援用したやり方で、受講生は7セッションのうち2セッションでホスト役となり、自分が考えた質問をグループメンバーに問いかけ、意見をもらったり議論したりして、自分の考えを深めるための情報を得ました。各セッションでグループメンバーが変わるので、多くの人から意見をもらう機会になりました。第12回の授業は、個人での活動の内容が第11回と異なりしました。第12回の授業では、受講生が最終課題を作り始めました。そして、その内容を生成AIに評価してもらい、それを踏まえて他の人から意見を聞きたい、あるいは議論したい質問を考え、議論しました。第13回の授業では、その時点で考えている10年後の未来の学びをグループの中で発表してもらい、相互コメントする活動を行いました。

①生成AI (Copilot, ChatGPT, Geminiなど) に次の質問を投げかけましょう。

「10年後の未来で誰が、どこでどのように学んでいるか」の内容とその理由・根拠を、実際の場面を説明する600~1500字以内の物語をつくってください。

※「誰が、やどこで、どのように」の部分には自分が考えたい未来の学びの場面のキーワードを入れて調べてみましょう。

例:「10年後の未来で小学生が、学校でどのように学んでいるか」の内容とその理由・根拠を、実際の場面を説明する600~1500字以内の物語をつくってください。

=====

【生成AIを使わない場合】今の時点で自分が考える未来の学びの物語のキーワードを挙げて、そのキーワードで検索してみましょう。出てきた事例などを②でリンクしてもらいましょう。いくつかのページを探してみましょう。

②得られた回答を下にコピー&ペーストしてください。そして、回答に対して、賛成/反対、不足している点、観点の追加、不要な箇所などをコメント・編集し、自分の未来の学びの考えに近づけましょう。

ヒント: これまでの授業をふりながら生成AIの内容を考えてみましょう。なんとか生成AIとやり取りしてもらってもよいです。その場合も、得られた回答をコピーしてコメントしてみてください。

=====

【生成AIを使わない場合】①で検索してウェブページのリンク(URL)を示したうえで、そのページに書かれている内容に対して、賛成/反対、不足している点、観点の追加、不要な箇所などのコメントをリンク(URL)の下にメモしてください。

③②の作業を踏まえて、自分の未来の学びをさらに考えるために、ほかの人から意見を聞きたい、あるいは議論したい点・質問を考えましょう。

第11回の授業で用いたワークシートの一部

今回の授業では、考えるきっかけを提供する目的(AL NEWSLETTER Vol.9, No.2と同様)、学生の成果物を評価する目的で生成AIを使用しました。また、ワールドカフェを援用したディスカッションを取り入れ、グループメンバーが変わる複数セッションを行うことで多くの人からコメントをもらいブラッシュアップする機会を作りました。これらの具体的な方法については、別の機会に詳しくお伝えできればと思います。(中澤)

(2) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: オープン教材をつくらう!

「オープン教材をつくらう!」(担当教員:中澤明子)では、オープンエデュケーションやオープン教材の定義・特徴・事例を、ゲスト講義を交えながら学んだ後、教材設計理論を学んだうえで、オープンエデュケーションやオープン教材について学べる教材を作り、オープンエデュケーションやオープン教材についての理解を深めることを目的としました。昨年度までにも開講していた授業です。

今回の授業では、学生は3つのグループに分かれて教材づくりを行いました。出来上がった教材は、学習の進み具合を可視化する工夫がなされた教材や、自分たちなりに「オープンになっている教材」を定義した教材、デザインを工夫して読みやすく書かれた英語の教材で、今回も個性あふれるものとなりました。受講生が作成した教材の一部を部門ウェブサイトで公開しました。至らぬ点もあるかと思いますが、ぜひご覧いただき、またご自身のオープンエデュケーションに関する学習に役立てていただけますと幸いです。(中澤)

教材はこちらから→<https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/news/?p=5383>

はじめに

このように思ったことはありませんか?

インターネット上の教材でしっかり学びたい

「オープンコンテンツ」聞いたことはあるけどどうやって見つけるの...?

この教材でのオープンコンテンツとは...

インターネットを基盤に教育機関の枠を超えて学習機会を増進させる取組み「オープン・エデュケーション」において、学習者と教育者の双方が活用できる教材のこと

→本教材では特にいつでも学習者がアクセスできるものを取り上げます!

学生が作成した教材①

(By 安部正健, A. S., Z. H., 山本笙太
CC BY NC 4.0)

Quick Quiz | What are MOOCs

What Are MOOCs?

Here is a quick test to see what you might know already and what you don't. If you notice yourself struggling, this is the perfect guide for you! If you get everything easily, don't worry, we still have a ton of practical information such as helpful portals and websites, useful keywords and filters, and how to use them.

MOOCs are courses delivered online and accessible to all for free. MOOC stands for:

M... Refers to the large scale of the courses. MOOCs are designed to support an unlimited number of participants. Unlike traditional classroom settings, which have physical space limitations, MOOCs can accommodate thousands or even hundreds of thousands of students from all over the world simultaneously.

O... Indicates that the courses are generally available to anyone, often free of charge. The ... aspect also means that there are typically no stringent prerequisites or admission processes, allowing a wide range of learners to participate. However, some MOOCs might charge for certifications or additional resources.

P 4

学生が作成した教材②

(By Louis HORIGOME and Kaho SHIMIZU
CC BY NC ND4.0)

(3) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 露ウ戦争を理論的に考える

「露ウ戦争を理論的に考える」（担当教員：中村長史）は、「授業で学んだ概念と事例を使いこなして、ロシア・ウクライナ戦争（露ウ戦争）の構図や原因、対応策を自分の頭で考えられるようになる」ことを目的に本年度から開講したものです。

戦争発生から2年が経ち、この間、メディアの報道等を通じて日々の戦局について詳しく知る機会は多くありました。一方、「戦争はなぜ起きたのか」、「戦争はなぜ終わらないのか」、「戦争は国際秩序にどのように影響するのか」といった点について私たちの理解はどの程度深まっているのでしょうか。日々の戦局を追うのに精一杯で（あるいは倦み疲れて）、こうした点を深く考える機会がなかったとすれば、私たちは「木を見て森を見ず」といった状況になってしまっているのかもしれない。戦争が私たちの感情を激しく揺さぶるものである以上、目の前の事態を追いかけるのは自然なことではあります。しかし、「森」をも捉えたいと思うならば、国際政治学における理論研究の蓄積を使わない手はありません。一般的・抽象的な思考を学んだうえで、それを活かして露ウ戦争という個別具体的な事案を考えたい—そうしたニーズに応えるために開講しました。

以上の問題意識を踏まえ、具体的には、以下のような3部構成で13回の授業を進めました。

第1回 ガイダンス

【第1部 戦争原因論】

第2回 露ウ戦争の年表づくり①（開戦前）

第3回 戦争はなぜ起こるのか①

第4回 戦争はなぜ起こるのか②

第5回 戦争はなぜ起こるのか③

【第2部 戦争終結論】

第6回 露ウ戦争の年表づくり②（開戦後）

第7回 戦争はなぜ終わらないのか①

第8回 戦争はなぜ終わらないのか②

第9回 戦争はなぜ終わらないのか③

【第3部 国際秩序論】

第10回 戦争は国際秩序にどう影響するのか①

第11回 戦争は国際秩序にどう影響するのか②

第12回 戦争は国際秩序にどう影響するのか③

第13回 まとめ

各回は、基本的に以下のような6段階を踏んで進行了ました。

- ①前回の授業に関するコメントシートを踏まえた議論
- ②キーワード（概念）についての講義
- ③キーワードを露ウ戦争（事例）に適用して考える個人ワーク
- ④同課題についてのグループワーク
- ⑤同課題についての教室全体での議論
- ⑥次回までにコメントシートを授業外に完成させる

「講義での理論の理解→演習での事例への当てはめ」という流れ、「個人ワーク→グループワーク→全体での共有（Think-pair-share）」という手順を一貫させたことで、受講者は回を追うごとに議論に慣れていったように思われます。

露ウ戦争への関心の高さを反映し、受講者数は当初想定していた定員を大きく超えました。その分、ひとりひとりのコメントシートの添削を必ずしも十分にできなかった点が教員の課題として残りました。次年度以降も試行錯誤を重ねながら開講していければと考えています。（中村）

ワークショップの開催

学内外へのアクティブラーニングの普及を目指して定期的にワークショップを企画・開催しています。2024年9月は、学内向けに以下のワークショップを開催しました。

駒場アクティブラーニングワークショップ「授業での生成AI活用の試行錯誤と学習活動のデザイン」（2024年9月13日）

東大で授業を担当されている先生方を対象に、駒場アクティブラーニングワークショップ「授業での生成AI活用の試行錯誤と学習活動のデザイン」を対面で開催し、14名の方が参加されました。前回から引き続き生成AIの活用を取り上げました。



ワークショップの様子

ワークショップの趣旨説明を行った後、自己紹介と導入ワークを行いました。導入ワークでは、参加者が、授業をする時に大切にしているポイントを生成AIに尋ね、得られた回答について自分の考えと合致するもの、そうでないものを考えてもらい、自己紹介と合わせてグループで共有しました。



導入ワークの様子

その後、ミニレクチャとしてアクティブラーニングでの生成 AI の活用の方針と昨年度からの実践での試行錯誤を講師の中澤が説明しました。具体的には、生成 AI を使用した学習活動を行うためのワークシートの変更と今年度の実践での学生の反応や講師の感想を共有しました。

休憩を挟んで後半は、学習活動と教材をデザインする際のポイントを確認した上で、参加者自身が自分の授業の 1 コマもしくは課題を想定して、どのような目的で生成 AI を使い、どのようなワークやワークシートを用意するのかを考えました。その後、参加者は考えた内容をグループで共有し、互いにコメントし合いました。

最後にワークショップのふり返しとして、参加者が新たに出てきた疑問・知りたいことをグループで共有し、ワークショップを終えました。



ふり返しワークの様子

ワークショップ後のアンケート（13 名が回答）では、どのような場面で活用しようと考えているかについて「次学期の授業で活かしたい」、「授業で叩き台のアイデアを出すときに活用したい」など、具体的な記述が見られました。一方、後半のワークをより充実することや、3 時間というワークショップの所要時間が長く感じたといった改善点も挙げられました。今後も引き続き有用な情報を提供する機会としてワークショップを企画・開催していきたいと思えます。（中澤）

◆ 今後の活動予定

2024 年度 A セメスターも授業を開講し、引き続きアクティブラーニング型授業モデルの検討・開発を行っています。また 2025 年 2～3 月に再びワークショップを開催する予定があります。オンライン授業や部門の活動に関する情報は、部門ウェブサイト

(<https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/>) で発信していきますので、ぜひご覧いただければと思います。ワークショップへの参加もお待ちしております。

◆ 書籍『つくって学ぶアクティブラーニング』のお知らせ

授業の開講を通して行なっているアクティブラーニング型授業のモデル開発のうち、「つくって学ぶ授業」に関する書籍が 2025 年 2 月に刊行されます。（本ニューズレター Vol.10, No. 2 でも詳細をお伝えしております。）

書籍では、「つくって学ぶ授業」として、学生が教材をつくる事例、授業をつくる事例、ワークショップをつくる事例を知ることができます。また、いわゆるアクティブラーニング型授業を進める際の試行錯誤についてもお伝えしています。「つくって学ぶ授業」に関心がある方だけでなく、広く多くの方に参考となる書籍になればと考えています。

(奥付)

- 発行年月日：2024 年 12 月 25 日
- 発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構 EX 部門
若杉桂輔・中澤明子・中村長史
- 連絡先：dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
- Web サイト：https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/